

あり、不正確な実施の項目数が多くなると HbA1c が高値になることより、自己注射手技による血糖コントロールへの影響が示唆された。

12 ナノパス 33G 針およびペンニードル 32G テーパー針とマイクロファインプラス 31G 針の使用感に関する比較検討

宮腰 将史・鴨井 久司・星山 彩子
金子 兼三

長岡赤十字病院糖尿病内分泌代謝
センター

外径が従来よりも細いナノパス 33G[®]；テーパー針（NT 針）とペンニードル 32G[®]；テーパー針（PN 針）について、通常のマイクロファインプラス 31G[®]；針（MP 針）を対象として、1 日 4 回注射の糖尿病患者 40 名（NT 針）と 1 日 2 回注射の糖尿病患者 30 名（PN 針）に変更前後での使用感に関してアンケート方式によるクロスオーバー比較試験を行った。合計 14 項目を Visual Analogue Scale で評価し、混合効果モデルで解析をした。PN 針は「注射針の取り付け・取り外し」以外のすべてに MP 針よりも有意に優れた満足度の成績を示した。NT 針で有意差が出たのは、見た目、痛み、内出血の 3 項目のみであった。NT 針の潤滑剤の塗布範囲を広くしたもので再調査したところ、PN 針と同じ優れた成績を示した。インスリン注射針の満足度は、針の細さのみならず、針先の加工も重要な要素であり、安定性、滑らかさ、デザイン、どのデバイスにも適合できるなどの点での改善が必要である。

II. 特 別 講 演

メタボリックシンドロームとアディポネクチン

大阪大学大学院

医学系研究科内分泌・代謝内科学講師

前 田 和 久

第 49 回新潟造血管腫瘍研究会

日 時 平成 19 年 3 月 2 日（金）
午後 6 時 30 分～
会 場 新潟大学医学部
有壬記念館 2 階

I. 一 般 演 題

1 当院で最近経験した未分化大細胞性リンパ腫 ALCL の 4 例

渡辺 輝浩・加藤 智治・小川 淳
浅見 恵子

県立がんセンター新潟病院小児科

未分化大細胞性リンパ腫（anaplastic large cell lymphoma）の 4 例を経験した。年齢は 2 歳から 9 歳、男女比は 2 : 2、部位は皮膚、肺、涙腺などの節外病変が多かった。1 例は孤発性皮膚病変のため無治療とし、3 例に化学療法を施行、うち 1 例が再発したが再寛解が得られ、全例が無病生存中である。

小児において未分化大細胞性リンパ腫はまれであり、1999 年より開始されたヨーロッパ（European Intergroup Co-operation on Childhood Non-Hodgkin Lymphoma）の治療研究でも登録は年間 50-60 例となっている。日本も 2002 年より参加し、稀少症例の蓄積に努めている。